

10周年記念事業 レポート REPORT

新緑の中を駆け抜け 初夏の安曇野を満喫

第1回信州安曇野ハーフマラソン（同実行委員会主催）が、6月7日、豊科南部総合公園を発着点とする21.0975キロメートルのコースで行われました。大会には、南は沖縄県、北は北海道、全国各地から4,921人の選手が参加。選手たちは、新緑に包まれた初夏の安曇野を満喫しながら駆け抜けました。



拾ヶ堰を横断し走り抜ける選手たち



大会ゲストの有森裕子さんが5キロ地点で応援
豊科南部総合公園フィニッシュ地点



2003年の大阪国際女子マラソンでは2時間40分46秒で11位。本大会も久しぶりの出場ながら女子の部10位と健闘

小穴智恵美さん
(堀金 扇町区)

全国に誇れる景観と“おもてなし”

子どもからお年寄りまでみんなの応援、そして、飲み物や食べ物のサービスなど地域の温かなおもてなしがとてうれしかったです。拾ヶ堰の脇を通り、北アルプスや田園地帯を望む景観は都会の大会にはない、全国に誇れるものだと思います。これを機会にこれからも大会に参加したいです。

地域のおもてなし

本村区ではのぼり旗100本を準備し、沿道から声援を送りました。このほかに、給水・給食サービスや和太鼓の演奏などが各所で行われました。



SUPPORTER



市駅伝部 結成10年 更なる飛躍を目指します

週2回、仲間同士で練習しています。合併してチームの団結力が強まり、全体の力が上がりました。今年は、新しいメンバーも入り、今後の大会が楽しみです。6月に開催されるこの大会は、冬場の練習の成果を試せる良い機会です。これからは、大会運営などにも協力したいです。
(主将 丸山純一さん)

第1回信州安曇野ハーフマラソン Half marathon



市歌の披露に向けて練習に励む三郷小学校合唱部の皆さん

安曇野への愛着を歌に込めて♪

市制施行10周年を機会に、市の歌を制定。安曇野市を全国の皆さんに知っていただくとともに、市民の皆さんに永きにわたって愛着を持っていただきたいという考えから、市歌の歌詞を公募。入選3作品の中から市民投票により東京都在住の保岡直樹さんの歌詞に決定しました。

この歌詞に桐朋学園大学名誉教授の飯沼信義さんが作曲し、10月4日、市制施行10周年記念式典で発表されました。

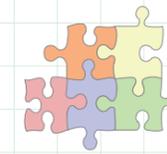
市歌を心の架け橋に

安曇野市の自然や歴史、燦めく情景を想い浮かべながら作詞しました。神々しい山々、清冽な水の流れ、澄みわたる風景は、わたしを惹きつけます。自分も安曇野市民になったつもりで、歌詞をつくりました。

歌には、人の心を結ぶ力があると思います。子どもからお年寄りまで、みんなの心をつなぐ希望の架け橋になってほしいと願っています。



作詞者
保岡直樹さん
(東京都世田谷区)



10周年記念事業レポート

市歌の歌声を 郷土創生の礎に！

市歌の制定にあたり、作曲のご指名を頂いたことに同郷の一人として心より感謝申し上げます。老荘青幼、すべての市民の皆さまに末永く愛唱される歌を作らねばと考えました。

親しみ易く、歌い易く、そして歌うたびに心の奥に何ものかを感じ取れるような深さと品格をもつ曲。難題でしたが、多くの皆さまの励ましで完成させることができました。この歌が不断に続けられる未来の郷土創造の礎石のひとつになって欲しいと、心から願っています。



作曲者
桐朋学園大学名誉教授
飯沼信義さん(豊科出身)

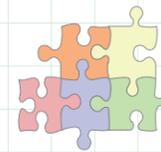


市歌CDジャケットと楽譜

2 市歌制定

- 一 市歌
水と緑と光の郷
- 二 祭囃子に みなぎる力
はるか歴史を 曳く我ら
いにしえ人の 想いをいまに
伝え佇む 道祖神
ほほえみの郷よ 安曇野は
ほっと心が 和むまち
ケヤキの先の 流れる雲を
仰ぐ瞳に やどる夢
語り交わす 熱き眼差し
この地を創る たくましさ
希望の郷よ 安曇野は
ともに未来へ 翔けるまち
- 三

Azumino City song



4 Film archive

あづみのフィルムアーカイブ

安曇野市の歩みを映像で綴る

家庭の押し入れなどに眠っている8ミリフィルムを掘り起こし、昔の安曇野の暮らしや文化風習をデジタル映像で甦らせるプロジェクト「あづみのフィルムアーカイブ」事業。市教育委員会と市民団体の「あづみのアーカイブ」が協力し、取り組みました。市民から提供された映像は、27年度末までに1本の映像にまとめ上映会で披露されます。



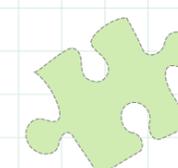
あづみのアーカイブ代表
映像作家 三好大輔さん
(穂高 等々力町区)

失われつつある大切なものを伝えたい

一般の方々が撮影したホームムービーと呼ばれる家庭の記録は、時代を経た今、新たな意味を持ち始めています。モノが溢れ情報社会と言われる現代、便利さと引き換えに大切なものが失われていると感じます。

かつて人々はモノを大切に、地域のつながりの中で生きていました。モノは無くても豊かだった時代。その記録が高度経済成長期と重なるように流行した8ミリフィルムに刻まれています。

安曇野に暮らす人々の力をお借りしながら、この土地の風景や人々の暮らしの記憶を残していく「あづみのフィルムアーカイブ」。豊かな営みの記憶を8ミリフィルムを通して伝えていきます。



昭和34年 須砂渡キャンプ場



昭和36年 堀金小学校運動会

D51貨物列車や結婚式の映像を家族で見たいと思います

トラック輸送が発達していない時代に、材木、石炭、農産物などの物資を遠方に運ぶため、貨物列車が主に活用されていました。

当時、明科駅では、流通の拠点として物資の積み込み、積み下ろし作業が行われており、この時の貨物列車の入れ替え風景を8ミリフィルムで撮影したものです。

また、近所の割烹料理店でいった私の結婚式を叔父が撮影してくれましたが、その後、映写機もなく、ほとんど見る事ができず、倉庫にしまったままになっていました。今回良い機会と思って、探し出して応募しました。デジタル化されたら、少し照れくさいですが、家族で見たいと思います。



映像提供者
おほりこうじ
大堀浩司さん
(明科 明科区)



昭和42年 結婚式の様子



昭和43年 明科駅で物資運搬の貨物列車の入れ替え作業

3 全国名水サミット in 安曇野

Water summit

育み、分かち合いながら生かす

昭和の名水百選「安曇野わさび田湧水群」がある安曇野市。全国の「名水」が所在する市町村の皆さんが集まる「名水サミット in 安曇野」が8月28日、29日の2日間、市内を会場に行われました。水環境や水質の保全などについて発表や意見交換が行われた「名水シンポジウム」では、市民の皆さんが安曇野の水や水質調査の結果を全国の皆さんに紹介し、安曇野の名水を全国に発信しました。

豊科郷土博物館
館長 百瀬新治さん
(堀金 岩原区)



二つの名水、清冽な「水」と堰を巡る「水」を次代に残したい

安曇野の名水の特徴は、北アルプスを由来とする清冽な水を持つブランド力はもちろんですが、安曇野の田園風景を形づくる堰や田に張られた水ではないでしょうか。

元来、水が乏しい場所であった安曇野が先人たちの努力と知恵により堰が張り巡らされ現在の姿になりましたが、水に苦勞してきた安曇野の歴史も多くの皆さんに知って欲しいと思います。

自然がもたらした湧水と人々が育んできた堰の水、2つの「名水」が車の両輪のようになり、将来にわたって安曇野を名水の地にしていくのだと考えます。

先人の努力に応えるためにも、地下水の涵養や河川の水質保全はもちろん、用水の保全も大切です。

市内の小中学校では、堰を通して安曇野の自然や歴史を学び、自分たちで堰を守り継ぐ活動をしています。水の保全と共に堰の大切さを、未来を担う子どもたちに伝え、残していきたいと思います。



安曇野の農地を潤し、田園風景を支える堰（拾ヶ堰）



昭和の名水百選に選ばれた安曇野わさび田湧水群



清らかな湧水



豊科北中学校科学部
部長 細萱柊太くん
(3年・右)
副部長 鳥羽虹希くん
(3年・左)

地元の誇れる水を守っていききたい

今回、水質調査をしてみて改めて安曇野の湧水や河川、堰の水は、全国でもきれいな水だと分かりました。同時に住んでいる自分たちもきれいな水が誇らしいと感じました。20年、30年経ってもきれいな水を保つには、住んでいる自分たちが進んで節水したり、水が汚れることを防いだりすることが必要だと思います。安曇野の水を守っていききたいです。



「安曇野の水」記念配布名水サミットでは地下水を水源とする市の水道水を詰めたペットボトルが記念に配布された。

大地の恵み、伝えよう、次代に！



Challenge 1



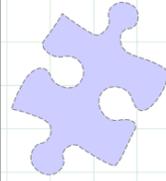
はぜ掛けの米作りに取り組む様子

岩 原区の「岩原の自然と文化を守り育てる会」では、区内に残る祭りの伝承や安楽寺跡の整備、国営アルプスあづみの公園事業用地で昔ながらの田んぼを復活させた米作りなどの活動をしています。本年度は、はぜ掛けによる米作りを通じて、市民の交流

を深め、安曇野の田園風景を市内外に伝えようと取り組んでいます。

同会の活動を指導する尾日向安幸さん（堀金岩原区）は、岩原区では烏川からの取水に苦労したことや、機械がない戦前には、人の手で土を運んで田を少しずつ広げていったことなど昔について語り、「昔ながらの農作業は大変だが残していくことは大切。これからも会の活動を支えていきたい」と話してくれました。

昔ながらの
田んぼを復活



協働のまちづくり

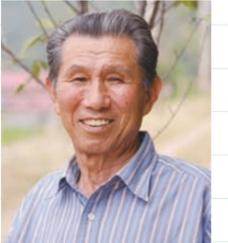
安曇野の 未来に向かって 市民チャレンジ

廃線敷に桜を植栽する区民の皆さん



Challenge 4 廃線敷に桜並木のレールを

潮 区では、5月25日、旧国鉄篠ノ井線廃線敷の遊歩道に桜の苗木約70本を植えました。この日は、区民約100人が参加。この取り組みは、日ごろから区民が健康づくりの場としてウォーキングなどで利用している散策路を一層楽しく利用できるよう、また、観光客にも親しまれるようにと企画したものです。区長の矢澤さんは「住民が参加してみんなでやるのが大切。子どもたちが成長して何年後かに自分が植えたという思い出になればいいですね。区民の健康増進の場として、また多くの観光客が訪れ、みんなが憩える場となるよう、これからも環境づくりに取り組みます」と話してくれました。



潮区長 矢澤久男さん
(明科 潮区)

Challenge 2

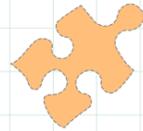
穂高人形飾り物展示



展示された穂高人形

穂 高人形・御船祭保存会では、5月7日の市役所新本庁舎開庁に合わせ、穂高人形と飾り物を5月7日から23日まで庁舎1階ロビーに展示しました。会場には、軍記物や絵巻物などを題材にした人形が飾られ、訪れた皆さんは、精巧に作られた作品に見入っていました。

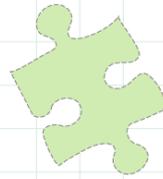
同会では、穂高神社の御船祭でのオフネの曳行（えいこう）や、所属する3つの教室がオフネに乗せる穂高人形を制作、技術継承のため後継者育成などにも取り組んでいます。会長の平林佳樹さん（穂高穂高区）は「展示を通じ、多くの皆さんに穂高人形を知ってもらうことができました。先人の努力により受け継がれてきた地域の伝統文化をこれからも残していきたい」と話してくれました。



穂高人形・御船祭保存会の皆さん

Challenge 3

季刊・安曇野文化 市制施行 10 周年記念特集



地 域の活性化と文化の発展を目的に、市の自然・歴史・人々などを紹介する季刊誌「安曇野文化」。本年8月に発刊した第16号では、市制施行10周年記念特集を組みました。同紙は、前身の「三郷文化」時代から地域のさまざまな年代の人々に執筆してもらい掲載。現在は、5地域にいる編集委員が中心となり、毎号約40人の市民が寄稿しています。特集では、宮澤市長へのインタビューや、市歌制定に携わった皆さん、市民の皆さんが市に寄せる期待などを掲載しました。

委員長の曾根原さんは「文字を通じて市民が発表し合うことで、地域の良さを再発見し、市の一体感や絆が深まればうれしいです」と話します。また、編集室の林さんは「執筆者の想いや読者が寄せる感想からは、書き手と読み手、作り手の人の繋がりを感じ、市全体に広がっていると思います」と手ごたえを話してくれました。

市制施行10周年記念事業を通じ、市民の皆さんの一体感づくりと協働のまちづくりを進め、地域の活性化や課題解決にも繋げていきます。安曇野の未来に向けて新たな出発点となった本年、市民の皆さんが取り組む記念事業を紹介します。



市制施行 10 周年記念特集掲載号



安曇野文化編集委員会
委員長 曾根原孝利さん
(三郷 七日市場区・右)
編集室 林公也さん
(堀金 小田多井区・左)

Challenge 5

光城山1000人SAKURAプロジェクト



毎 年、登山道沿いに咲く様子が「昇り竜」に例えられる光城山（豊科光）の桜。市や、光城山を管理する上川手山林財産区管理会、地元区、里山保全活動を行うNPO法人の代表者などで構成する「光城山1000人SAKURAプロジェクト」では、老木となり花があまり咲かなくなった桜が多くなったことから、本年11月に桜の植樹を行います。会長の高橋恒雄さん（豊科大口沢区）は「大正期に地元の青年たちが植えてから今日まで、地域で大切に桜を育ててきました」と先人の苦勞を振り返り、大きく育つには多くの人の協力と年月が必要と、協力を呼び掛けます。プロジェクトでは、人々が訪れる光城山を目指し、山にまつわる歴史文化の伝承、自然環境保全などにも取り組みます。



昨年の試験植樹の様子



満開の頃の光城山の桜

植樹には、安曇野市となった平成17年に生まれた市内の小学4年生の皆さんとその家族も参加する予定で、高橋さんは「植樹後も、一緒に桜の成長を見守り、光城山に足を運んでもらいたい」と期待を寄せました。